



Title	<書評>田島奈都子編著『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争』
Author(s)	竹内, 幸絵
Citation	デザイン理論. 2017, 70, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

田島奈都子編著

『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争』

勉誠出版, 2016年, 158頁

竹内幸絵／同志社大学

本書は長野県阿智村に秘蔵されていたプロパガンダ・ポスターコレクションの紹介を柱とした、一般の読者を想定したB5判の図録仕様の書籍である。戦時期に同村長を務めていた原弘平氏所蔵の121種に、関連する他館所蔵のポスターを加えた全152点がすべてカラーで掲載されている。ポスターは制作の目的別に「募兵」「戦時体制の教化」「労働力の確保」「女性と子供」「戦費調達のための貯蓄」「節約と供出」「戦時期の長野県」「傷兵・遺家族」の8章に区分されているが、この章立てそのものが国内向けプロパガンダ・ポスターを検討する際の指針として有用であろう。章ごとに各ポスターへの解説、他に9つのコラム、作家解説や関連年表も備えるという充実した内容で、日本の第二次大戦期国内向けプロパガンダ・ポスターを俯瞰できる基本書として重要な出版である。

本書内で著者が「紹介する阿智村コレクションは全部で121種、135枚しかなく、それらは（中略）十五年戦争期に製作された全体数からすればごくわずかに過ぎず」と書く通り、著者自身が本学会第51回大会において行った発表（「戦前期日本のデザイン界における大戦ポスターの影響と受容」2010年7月12日）で示した膨大な戦時期のポスター等のグラフィック資料群を顧みれば、同書収録のポスター数は多いとは言えないかもしれない。しかしそれでも今回の出版は昨年大きな話題となった。日本経済新聞（文化欄2016年7月28日）、朝日新聞（天声人語2016年11月18日）と大手新聞社が相次いでとりあげた背景には、同書の企画や構成のみならず、掲載さ

れた戦時中のポスター群自身が持つ訴求力への注目があったと考えられる。つまり戦時期のプロパガンダ・ポスターは、デジタル技術による精緻で計画的なデザインに慣れた今日の私たちの眼をも奪う表現であった。そして今日のメディアは、戦時期の市井の人々が見せつけられたビジュアル・メディアが一級の週及力を持つものであったことを再認識したのである。「テレビもネットもない時代。政府の欲した『一億一心』はかくて醸成された」（前掲、「天声人語」朝日新聞）。

本書はこのような社会的なムーブメントを起すに足る意義を持つ出版であったが、手にして驚くのは、解説部分に書かれたポスターの詳細情報の充実である。当コレクションに2011年から関わった著者の綿密な作品調査の成果は、コレクション全点の発行元や発行年、判明したものはデザイナー名、少数ではあるが一部の作品には印刷部数の情報にまで及んでいる。ポスターは書籍資料とは異なり通常は破棄される性質のものであり、発行時の記録は極めて残りにくい。レゾネも存在せず後世に残されたポスターにかかるこうした基本情報の同定は困難を極める。まして戦時中の制作物については記録が抹消されている。同誌掲載の情報が多大な労力に基づくことは疑いない。この基本情報の充実により同書は一般の読者を惹きつけつつも研究書としての価値も高いものとなっている。

こうした基本情報に加えて圧巻なのは、ポスター周辺情報の提供である。たとえば『海軍工廠要員急募』ポスターでは、日付欄の空欄に記載があるものとないものの存在を突き

止めているし、『援護の光に輝く更生』ポスターでは、阿智村コレクションでは長野県支部と印刷された箇所が、他館所蔵作では埼玉県支部や福岡県支部と記されていることにも言及している。さらにこのポスターの原画制作者がポスター内の軍人が胸につけている「傷病軍人章」のデザイナーでもあるなども解説する。他にも当時の「貯蓄債権」に関して提供されている情報「同時期の支那事変国債の販売額面が、一枚十円から1,000円までの五種類」は読者に現実味を提供するし、三月十日の陸軍記念日のポスターに描かれた兵士の制服を、当時の新聞が「思ひ出も懐かしい日露戦争当時の華やかなしかも凛々しい」と報じた、など社会情勢の断片をも細かに示している。本書を魅力的にしているのはこのようなデザイナーや社会の周辺状況の具体的な書き起こしである。同書はデザイン史・美術史の研究書ではあるが、むしろ社会史の一翼を担う研究成果として価値が高いといえよう。ポスター制作時の内実に踏み込み周辺社会を詳細に解説する。これこそが著者の研究の真骨頂であり、このような調査は著者を置いて他にはできないまい。

一方9つのコラムのいくつかには、グラフィック・デザイン史におけるプロパガンダ・ポスターの立ち位置が示されている。中でも「プロパガンダ・ポスターにおけるデザイン——翻案と写真——」は、グラフィック・デザインのモダニズムに視点をおいたものだ。

このなかで最もユニークな著者の視点は、モダニズム写真表現がコラージュで創り出した構図や誇張が、手描きポスター図案にも取り入れられたとする点だ。「支那事変国債」を手にする主婦の手(図1)の「局所的な拡大や極端な遠近感の演出は、新興写真においては撮影の常套手段」だとする。確かに(図

2)なども、群衆と英雄を誇張した遠近で対置する、モダニズム写真に多い構図そのものである。これらに使われているエアブラシのぼかし技法が戦時期グラフ雑誌でのその利用と相関があるという言及も、戦時期のプロパガンダ・デザインの全容を検討する際に、描画と写真を結ぶ重要な指摘であろう。

筆者は51回大会でも海外作品の翻案という指摘を多く例示していた。一部が確実に焼き直しであることは疑いなく、本書内の1925年作のジャン・カリリュ作の石鹸のポスターと1939年の長野県の健康週間ポスターの相似は誰もが頷くところだ。ただ小畑六平作の軍人や工員らの横顔が並ぶ図案がグスタフ・クルーティスを翻案したとする指摘にはいささか無理がある。翻案か否かの指摘よりは、戦時期に登場した新しい写真表現がどのように市井の人びとに影響したかをはかる後半の記述に意識が向けられる必要があっただろう。

戦時期の表現が戦後に与えた影響(あるいはもたらした拒否感)は、日本のグラフィック・デザイン史にとって重要な問題である。手薄であった国内向けプロパガンダ・ポスターの基礎的な情報を体系的に整理し示す同書は、これを検討する上でも重要な基本書として今後も参照される存在となるだろう。



図1 「支那事変国債——無駄を省いて国債報国——」作者不詳、大蔵省、1940年(阿智村管理番号38 本書内番号56)



図2 『国を護った傷兵守れ』和田三造、傷兵保護院、文部省、1938年(阿智村管理番号121 本書内番号32)